

第4節 高等学校における「基礎的・汎用的能力」の育成

(1) 高校生期のキャリア発達課題

高校生期は、自我の形成もかなり進み、身体的にもほぼ成熟し、自立の要求が高まっていく時期である。所属する集団が増加し人間関係もより広がり、そうした中で、様々な役割や期待に応えながら望ましく円滑な人間関係を築いていくことが求められる。しかし、身体的・生理的側面での早熟化が進む反面、ストレス耐性や社会性に未熟さが見られるなど、自分自身に自信が持てない生徒も少なくない。

またこの時期は、大人の社会でどう生きていくかという課題に会う時期である。自己実現の欲求を持ちながら、自分の人生をどう生きていくか、生きることの意味は何かといった、人間としての在り方生き方を理念的に考える一方で、就職や進学を控え、現実的な検討・対応や具体的な選択・決定が求められる。特に高校生期の時期は、自分の将来を具体的に設計しその実現に積極的に取り組む生徒がいる一方、理想を求めることに急で、とかく現実を否定する傾向も強まるため、不透明な未来にこの時期特有の様々な不安や悩みを抱え、中には、無気力傾向に陥ったり、非行に走ったりする生徒も見られる。

「表5-3」は、高校生期のキャリア発達の主な特徴を、入学時から在学期間半ばごろまでと、その後卒業を間近にするころまでに区分してまとめたものである。ここに例示される特徴は、様々な調査研究等の成果を踏まえて整理されたものであるが、それぞれの学校が立地する地域の状況、学科や設置形態の特色、生徒の実態などによって、実情とのずれが生じることは当然である。「表5-3」は高校生期のキャリア発達の固定的な標準を示すものではない。本表は、キャリア発達の視点から高校生を理解する上での参考資料、あるいは、学年ごとの目標設定のための議論の契機として活用されるべきだろう。

表5-3 高等学校段階におけるキャリア発達の特徴の例

入学から在学期間半ばごろまで	在学期間半ばごろから卒業を間近にするころまで
<ul style="list-style-type: none"> ●新しい環境に適応するとともに他者との望ましい人間関係を構築する。 ●新たな環境の中で自らの役割を自覚し、積極的に役割を果たす。 ●学習活動を通して自らの勤労観、職業観について価値観形成を図る。 ●様々な情報を収集し、それに基づいて自分の将来について暫定的に決定する。 ●進路希望を実現するための諸条件や課題を理解し、検討する。 ●将来設計を立案し、今取り組むべき学習や活動を理解し実行に移す。 	<ul style="list-style-type: none"> ●他者の価値観や個性を理解し、自分との差異を認めつつ受容する。 ●卒業後の進路について多面的多角的に情報を集め、検討する。 ●自分の能力・適性を的確に判断し、自らの将来設計に基づいて、高校卒業後の進路について決定する。 ●進路実現のために今取り組むべき課題は何かを考え、実行に移す。 ●理想と現実との葛藤や経験等を通し、様々な困難を克服するスキルを身に付ける。

出典：文部科学省『小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引』平成18年

このようなキャリア発達段階にある高校生期においては、本章第1節で整理したように、「自己理解の深化と自己受容」「選択基準としての勤労観、職業観の確立」「将来設計の立案と社会的移行の準備」「進路の現実吟味と試行的参加」が特に重要な課題となる。各高等学校においては、これらを基盤としつつ、生徒や地域の実態に即し、学校や学科の特色やこれまでの取組を生かしながら、「基礎的・汎用的能力」に示される4つの能力（「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」）それぞれについて具体的な目標を設定していくことが必要である。

(2) 各教科等との関連

① 「総合的な学習の時間」「特別活動」との関連

平成23年1月にとりまとめられた中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」は、キャリア教育が全ての教育活動を通して実践されることを前提としながら、「各教科・科目等における取組は、単独の活動だけでは効果的な教育活動にはならず、取組の一つ一つについて、その内容を振り返り、相互の関係を把握したり、それを適切に結び付けたりしながら、より深い理解へと導くような取組も併せて必要である」と指摘しているが、高等学校においてその重要な役割は「総合的な学習の時間」や「特別活動」が中心的に担うものである。

高等学校における総合的な学習の時間は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すると共に、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の在り方生き方を考えることができるようにする」ことを目標としている。また、総合的な学習の時間においては、「各教科・科目及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」が求められる。このような教育活動を通して「自己の在り方生き方を考えることができるようにする」ことが、総合的な学習の時間においては重要である。

また「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う」ことを目標とする「特別活動」、とりわけ「適応と成長及び健康安全」「学業と進路」等を内容とする「ホームルーム活動」は、キャリア教育の中核的な実践の場である。「ホームルーム活動」を中心として「特別活動」の全体を通じてキャリア教育を実践するに当たっては、社会の一員としての自己の生き方を探究するなど、人間としての在り方生き方の指導が行

られるようにすることが不可欠であり、その際、他の教科等、特に公民科や総合的な学習の時間との関連を図ることが特に求められている。

③ 各教科との関連

「各教科」におけるキャリア教育の実践は、学習意欲の向上や学習習慣の確立にもつながることが期待されている。また、上掲の中央教育審議会答申においては、高等学校におけるキャリア教育の推進方策の柱の一つとして「キャリアを積み上げていく上で必要な知識等を、教科・科目等を通じて理解させること」を挙げ、次のように指摘している。

特に、高等学校の段階は、学校と家庭以外での生活や社会の中での活動が増える時期にもかかわらず、現在の高校生は社会の仕組みや様々な状況に対処する方法を十分には身に付けていないと指摘されており、知識として学ぶことと体験を通して学ぶことの両面から、現実社会の厳しさも含めて、一人一人の将来に実感のあるものとして伝えることが特に重要である。その際、例えば、公民科や家庭科等を通じて、今日の社会が分業によって成り立っており、職に就き、働くことを通じてその一端を担い、人々が相互に支え合っていることを理解することや、労働者としての権利や義務、雇用契約の法的意味、求人情報の獲得方法、人権侵害等への対処方法、相談機関等に関する情報や知識等を学習すること、また、人の一生の中で大きな要素となる「仕事」と「家庭生活」の調和の取れたライフスタイルを創造するために必要な知識等を学習することが必要である。その際、これらの知識は、一人一人の将来に直接かかわる実感のあるものとして伝えることが特に重要である。(第3章3(1)②)

また、総合学科においてすべての生徒に原則として入学年次に履修させるものとされ、総合学科以外の高等学校においても学校設定教科に関する科目として開設することができる「産業社会と人間」は、キャリア教育の中核的な実践の場として位置付く。中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について(答申)」は、「産業社会と人間」を開設していない多くの高等学校について、「総合学科以外の多くの学校では、総合的な学習の時間や特別活動等の中で行われているのが現状である。しかし、実態としては、この4つの観点を踏まえた学習の内容の一部のみが行われている場合が多いことから、これらの学習を確実に進めるよう、総合的な学習の時間等を効果的に活用していくことが望まれる」との現状認識に立って、「『産業社会と人間』については、実施することの意義を認めている学校・教育委員会がほとんどを占めている。今後、『産業社会と人間』において指導される成果・課題を踏まえて、その充実に向けた取組が進むことが期待され、また、高等学校の教育課程に、『産業社会と人間』又はそれに類する教科・科目等のような中核となる時間を明確に位置付けることについて、更に検討が必要である」と提言している。今後も継続的に検討されるべき重要な課題であろう。このような「産業社会と人間」の目標や内容などについては、高等学校学習指導要領第1章第2款4が次のように定めている。

この科目の目標、内容、単位数等を各学校において定めるに当たっては、産業社会における自己の在り方生き方について考えさせ、社会に積極的に寄与し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を養うとともに、生徒の主体的な各教科・科目の選択に資するよう、就業体験等の体験的な学習や調査・研究などを通して、次のような事項について指導することに配慮するものとする。

- ア. 社会生活や職業生活に必要な基本的な能力や態度及び望ましい勤労観、職業観の育成
- イ. 我が国の産業の発展とそれがもたらした社会の変化についての考察
- ウ. 自己の将来の生き方や進路についての考察及び各教科・科目の履修計画の作成
 (高等学校学習指導要領 第1章第2款5)

以下では、これらを前提としながら、各教科とキャリア教育との関連について「基礎的・汎用的能力」の育成に特に密接に関連する部分に注目し、各教科の学習指導要領解説から具体例を挙げつつ整理したい。なお、以下に示す具体例はあくまでも例示であり、各教科を通じたキャリア教育の取組の機会を網羅的に示すものではない。各学校においては、学科や設置形態の特色、地域社会の特徴、生徒の実態などに応じて、創意ある多様な実践が展開される必要がある。

【人間関係形成・社会形成能力】

人間関係形成・社会形成能力の重要な要素としてコミュニケーション能力があるが、とりわけ、コミュニケーションの基盤となる言語の能力を培うために重要な役割を担うのは、各学科に共通する教科（以下、本文では「共通教科」、引用文の枠内においては〔共通〕と略す）では「国語」「外国語」、主として専門学科において開設される各教科（以下、本文では「専門教科」、引用文の枠内においては〔専門〕と略す）では「英語」が重要な役割を担っていることは自明であろう。しかし、生徒の言語に対する関心や理解を深め、言語活動を充実することはすべての教科等の指導に当たって配慮すべきことである。ここでは、「国語」「外国語」「英語」以外の教科に焦点を絞り、人間関係形成・社会形成能力に関連の深い部分を引用する。

【例】芸術〔共通〕(第2章第7節 工芸I 4内容の取扱い p.90)
 鑑賞において造形的な視点を豊かにもって対象をとらえるためには、言葉で考えさせ整理することも重要である。言葉にすることにより、美しさの要素が明確になったり、言葉を使って他者と意見を交流することにより、新しい価値などに気付いたりすることができるようになるからである。
 指導に当たっては、生徒が個性を尊重し合いながら、工芸作品や互いの作品について批評し合い討論する機会を設け、自他の見方や感じ方の相違などを理解し、作品の見方、感じ方を広げ、深めるようにしていくことが必要である。その際、鑑賞レポートを作成するなどの学習も充実させていくことが大切である。

ここで指摘される共通教科「芸術」だけでなく、専門教科「音楽」「美術」においては、他者を尊重し協力する力の育成に働きかける豊かな学習活動を有している。

【例】保健体育〔共通〕（第2章第1節 体育 2目標 p.16）

体育では、体を動かすことが、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資するものである。この資質や能力とは、それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを深く味わおうとする主体的な態度、公正に取り組む、互いに協力する、自己の責任を果たす、参画するなどの意欲や健康・安全への態度、運動を合理的・計画的に実践するための運動の技能や知識、それらを運動実践に活用するなどの思考力、判断力などを指している。

また、「体育」は共通教科・専門教科を問わず、コミュニケーションやチームワークに関わる能力を向上させる学習活動が極めて多い。また例えば、共通教科「家庭」における「生活デザイン」では、高齢者の自立的な生活を支援することの意味やコミュニケーションの重要性を理解することができるようにすることが求められるなど、「家庭」においては共通教科・専門教科ともに、人コミュニケーションをはじめとする人間関係形成に関わる多くの学習機会がある。

【例】情報〔共通〕（第1部第2章第1節 第1目標 p.18）

情報の特徴と情報化が社会に及ぼす影響を理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行う能力を養い、情報社会に積極的に参画する態度を育てる。（高等学校学習指導要領 第2章 第10節 情報 第2款 第1社会と情報 1目標）

この科目のねらいは、情報社会に積極的に参画する態度を育てることである。その際、情報を適切に活用し表現する視点から情報の特徴や情報社会の課題について、情報モデルや望ましい情報社会の構築の視点から情報化が社会に及ぼす影響について理解させ、情報機器や情報通信ネットワークなどを適切に活用して情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行うために必要な基礎的な知識と技能を習得させることもねらいとしている。

さらに「情報」においても、共通教科・専門教科とも、情報機器を活用したコミュニケーションに関わる能力の向上に直接的に働きかける様々な学習活動が展開される。

【例】商業〔専門〕（第2章第4節 ビジネス実務 第2 2(1)オフィス実務 p.21）

2(1)ア 企業の組織と仕事 イ ビジスマナーとコミュニケーション
3(2)ア 内容の(1)のアについては、企業の組織と意思決定の流れ、職業人としての心構えと良好な人間関係の構築の必要性、仕事の進め方や改善方法などを扱うこと。イについては、訪問、受付案内などの際のマナー及びディスカッションや交渉などのコミュニケーションの技法を扱うとともに、ディベートなどを通してコミュニケーション能力の育成を図ること。（高等学校学習指導要領 第3章 第3節商業 第2款 第4ビジネス実務 2内容、3内容の取扱い）

ア 企業の組織と仕事

ここでは、企業の組織と意思決定との関係及び企業における意思決定の流れについて理解させる。また、職業人としての望ましい心構えや良好な人間関係を構築することの必要性、職場における人間関係と接し方が仕事に及ぼす影響及びチームとして働くことの意義について考察させる。さらに、年間・月間などのスケジュール表の種類及びガントチャートの活用やPERTによる日程管理を取り上げ、仕事の進め方や改善方法について理解させる。

イ ビジネスマナーとコミュニケーション

ここでは、「ビジネス基礎」での学習を踏まえ、挨拶、応対するときの表情、受付案内、電話応対、座席配置など応対に関するマナー及び慶事、弔事、贈答など交際に関するマナーを、実習を通して習得させ実践できるようにする。また、ディスカッション、交渉、説明、苦情対応の方法などを、実習を通して習得させ実践できるようにするとともに、ディベートを通して、相手の考えを理解し、それを踏まえて自己の考えを効果的に伝えることができるようにする。

ここに挙げた専門教科「商業」はもちろんのこと、人に直接関わる職業について学ぶ専門教科「福祉」「看護」等においても、それぞれの専門性を生かしたコミュニケーション・スキルの向上に寄与する豊かな学習機会がある。

【自己理解・自己管理能力】

【例】国語 [共通] (第2章第5節 古典A 3内容 p. 65)

ア 古典などに表れた思想や感情を読み取り、人間、社会、自然などについて考察すること。(高等学校学習指導要領 第2章 第1節国語 第2款 第5古典A 2内容)

古典などに表れている、様々な思想や感情には現代に通じるものもあれば、異質なものもある。これらに触れることを通して、ものの見方が広くなり、考え方が深まり、豊かな感性や情緒がはぐくまれる。古典を読むことを通して、自らの生活や人生に目を向け、その在り方を深く考える態度を育成することが大切である。

【例】外国語 [共通] (第1章第2節 外国語科の目標 p. 8)

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。(高等学校学習指導要領 第2章 第8節外国語 第1款 目標)

外国語科の目標は、コミュニケーション能力を養うことであり、次の三つの柱から成り立っている。

- ① 外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深めること。
- ② 外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成すること。
- ③ 外国語を通じて、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする能力を養うこと。

(中略) ②は、外国語の学習や外国語の使用を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりすることに積極的に取り組む態度を育成することを意味している。具体的には、理解できないことがあっても、推測するなどして聞き続けたり読み続けたりしようとする態度や確認したり繰り返したり説明を求めたりする態度、自分の考えなどを積極的に話したり書いたりしようとする態度などを育成することを意味している。このようなコミュニケーションへの積極的な態度は、国際化が進展する中であって、異なる文化をもつ人々を理解し、自分を表現することを通して、異なる文化をもつ人々と協調して生きていく態度に発展していくものである。したがって、外国語の学習や実際の使用を通してこの目標を達成しようとすることは、極めて重要な意味をもつ。

共通教科「国語」や「外国語」や専門教科「英語」における言語活動は、コミュニケーションに関わる能力を向上させるだけでなく、自己理解を深めることにも寄与するものである。また、自己理解の深まりにより、他者理解や社会参画も促進されることが示されて

いる。「基礎的・汎用的能力」を構成する4つの能力は、それぞれが相互に密接に関わっているが、上に挙げた学習指導要領解説の指摘はその具体的な一側面を示す好事例である。

【例】農業〔専門〕（第2章第2節 第1目標 p.17）

農業に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技術の深化、総合化を図るとともに、問題解決の能力や自発的、創造的な学習態度を育てる。（高等学校学習指導要領 第3章 第1節農業 第2款 第2課題研究 1目標）

自発的、創造的な学習態度の育成に当たっては、課題の解決を図ろうとする学習の活動全般を通して、創意工夫する面白さと学習の喜びを体験させ、自らの興味・関心につながる学習の意義を理解させ、学習方法を習得させるとともに、学習意欲を喚起し、自律的な学習や工夫する学習及び自ら評価する態度を育成することが必要である。

【例】家庭〔専門〕（第2部第2章第1節 生活産業基礎 第2 2(4)職業生活と自己実現 p.70）

2(4)職業生活と自己実現

3(2)エ 内容の(4)については、生活産業にかかわる職業人に求められる資質・能力と役割や責任、職業資格を専門科目の学習と関連付けて扱うこと。（高等学校学習指導要領 第3章 第5節家庭 第2款 第1生活産業基礎 2内容3内容の取扱い）

ここでは、生活産業の職業人に求められる資質や能力としては、人や生活に対する理解、衣食住、ヒューマンサービスにかかわる専門的な知識や技術、コミュニケーション能力などがあることを理解させる。

また、必要な資質、能力、知識や技術は専門科目の学習を通して身に付けていくことができることを、資格の取得や将来のスペシャリストを目指した学習プランを立てさせることなどを通して具体的に理解させ、専門科目の学習に向けての意欲を高めさせる。また、法令を遵守することはもとより、製品の提供、保育、家庭看護や介護にかかわるサービスの提供などには、より高度な責任が伴うことについても理解させる。

その上で、それらの資質や能力を生かして生活産業のスペシャリストとして働くことが自己実現につながっていくことを、社会人講師の講話や生活産業現場の見学などを通して理解させる。

職業にかかわる専門教科においては、生徒一人一人の興味や関心を基盤とする学習への動機付けの重要性や、それぞれの産業分野におけるスペシャリストとしての自己実現に向けて意欲的に学習に取り組む必要性が多く示されている。一人一人の生徒が自らの興味・関心への認識を深め、自らの将来を展望しつつ主体的に学習に取り組む力は、すべての教科を通して育成されるものであるが、職業にかかわる専門教科の果たすべき役割はとりわけ大きいと言える。

【課題対応能力】

学校教育においては、生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させると共に、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに特に意を用いなければならない。これは、学校教育法第30条第2項に定められ、第62条によって高等学校に準用される。課題を発見・分析し、適切な計画を立てて課題を解決するために必要な

力は、高等学校におけるすべての教育活動を通してはぐくまれるものであり、各教科における指導もまたその重要な機会である。それぞれの科目や単元・題材などの特質に応じた多様な取組が期待される。

【例】地理歴史 [共通] (第2章第2節 世界史B 2(5)地球世界の到来 p. 46)

(5) オ 資料を活用して探究する地球世界の課題

地球世界の課題に関する適切な主題を設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、資料を活用し表現する技能を習得させるとともに、これからの世界と日本の在り方や世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させる。(高等学校学習指導要領 第2章 第2節地理歴史 第2款 第2世界史B 2内容)

「オ 資料を活用して探究する地球世界の課題」は、これまでに習得した知識や技能を活用して、生徒自らが主題を設定し資料を用いて探究する活動を通して、歴史的な考察方法を習得することを目指している。

【例】数学 [共通] (第1部第3章第2節 指導上配慮すべき事項 pp. 67-68)

3 指導に当たっては、各科目の特質に応じ数学的活動を重視し、数学を学習する意義などを実感できるようにするとともに、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 自ら課題を見いだし、解決するための構想を立て、考察・処理し、その過程を振り返って得られた結果の意義を考えたり、それを発展させたりすること。
- (2) 学習した内容を生活と関連付け、具体的な事象の考察に活用すること。
- (3) 自らの考えを数学的に表現し根拠を明らかにして説明したり、議論したりすること。(高等学校学習指導要領 第2章 第4節数学 第3款各科目にわたる指導計画の作成と内容の取扱い)

(1)は、問題の解決に関することを述べている。

「自ら課題を見いだし」とあるが、課題についてはすでに数学的に表現されているものであっても構わない。大切なことは、一人一人の生徒にとって解決する必要性のある課題であることである。その課題を分析し、解決のための構想を立て、考察・処理するが、場合によっては再度、構想を立て直すことも必要である。結果を得たら、その過程を振り返り、条件がどこに生かされているか、条件を変えると結果はどのように変わるか、見方を変え違うやり方で結果を得ることはできないかなどを検討し、可能ならば新たな課題を設定する。このような一連の活動を通して、主体的に数学を学ぶ態度が育てられるのである。

(2)は、学習した内容を日常生活や社会生活などにおける問題の解決に活用することを述べている。

この場合、日常生活や社会生活などにおける事象の数学的な側面に着目し、数学的に表現(数学化)することが必要である。また、数学的な結果が得られたら、結果を元の事象に戻し、その意味を考えることも必要である。このような活動が、数学的な表現を見直し、そのよさを認識することにつながるのである。

【例】理科 [共通] (第1部第2章第2節 物理基礎 3(2)様々な物理現象とエネルギーの利用 p. 33)

様々な物理現象とエネルギーの利用に関する学習活動と関連させながら、観察、実験を通して、情報の収集、仮説の設定、実験の計画、実験による検証、実験データの分析・解釈、法則性の導出など物理学的に探究する方法を習得させるようにする。各探究活動では、これらの探究の方法を課題の特質に応じて適切に取り上げ、具体的な課題の解決の場面でこれらの方法を用いることができるように扱う必要がある。

【例】水産 [専門] (第2章第5節 水産海洋科学 第2 2(4)海洋に関する探究活動 pp. 32-33)

適切な研究課題を設定し、課題を探究する活動を通して水産業や海洋関連産業に関

する科学的な見方や考え方、自発的な学習態度の育成を図ることをねらいとしている。
具体的な研究課題の事例として、水産資源量及び漁業生産量の変化と水産物需給への影響、海洋環境の変化が気象や人間生活に及ぼす影響、それぞれの地域で推進される水産業活性化方策の現状や展望、地域の特産物を活用した商品開発など新たな展開等が考えられる。

また、発表の機会を設けるなど、学習や研究活動等の成果を地域や産業界に発信できるようにする。

【キャリアプランニング能力】

高等学校教育の目標を定める学校教育法第51条が規定するように、社会において果たさなければならない使命の自覚に基づき、個性に応じて将来の進路を決定させることは、各高等学校が中核的に取り組むべき課題の一つである。それゆえ、現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力の育成は、高等学校の教育活動全体を通じて取り組まなくてはならない（学習指導要領第1章第5款5(2)）。その際、本項冒頭に引用した中央教育審議会答申が指摘するように、生徒がそれぞれのキャリアを積み上げていく上で必要な知識等を身に付ける機会として「公民」や「家庭」での学習はとりわけ重要である。

【例】公民 [共通] (第2章第1節 現代社会 2(2)現代社会と人間としての在り方
生き方 pp. 11-12)

ア 青年期と自己の形成

生涯における青年期の意義を理解させ、自己実現と職業生活、社会参加、伝統や文化に触れながら自己形成の課題を考察させ、現代社会における青年の生き方について自覚を深めさせる。(高等学校学習指導要領 第2章 第3節公民 第2款 第1現代社会 2内容)

「自己実現と職業生活」については、現代社会の特質や社会生活の変化とのかかわりの中で職業生活をとらえさせ、望ましい勤労観・職業観や勤労を尊ぶ精神を身に付けさせるとともに、自己の個性を発揮しながら新たなものを創造しようとする精神を大切に、自己の幸福の実現と将来の職業生活や人生の充実について触れながら考察することが大切である。

【例】家庭 [共通] (第1部第2章第2節 家庭総合 2(5)生涯の生活設計 p. 33)

(5) 生涯の生活設計

生活設計の立案を通して、生涯を見通した自己の生活について主体的に考えることができるようにする。(高等学校学習指導要領 第2章 第9節家庭 第2款 第2家庭総合 2内容)

ここでは、家庭科の学習を通して自らの生き方を見つめ、生涯にわたる生活設計ができるようにする。

…(中略)…人の一生における就職や結婚などの重要な課題を認識させ、自分の目指すライフスタイルを実現するために、経済計画も含めた生涯の生活設計に取り組ませる。その際、家族や友人、地域の人々と有効な人間関係を築き、より豊かな衣食住生活を営むための知識と技術を身に付けることが、生活設計の基礎となることを認識させ、単なるライフイベントの羅列に終わらないように留意する。また、生活設計の実現には、様々な社会的条件が大きく影響することについても取り上げ、生活設計を通して社会の動きを見つめ、広い視野をもって生活を創造することや不測の事態にも柔軟に対応する必要性を認識させる。

また、職業に関する専門教科においては、それぞれの産業分野におけるスペシャリスト

として働くことや、職業人としての将来設計にかかわる具体的な能力を高める様々な学習が展開される。

【例】工業 [専門] (第2章第1節 工業技術基礎 第1目標 p. 11)

工業に関する基礎的技術を実験・実習によって体験させ、各専門分野における技術への興味・関心を高め、工業の意義や役割を理解させるとともに、工業に関する広い視野と倫理観をもって工業の発展を図る意欲的な態度を育てる。(高等学校学習指導要領 第3章 第2節 工業 第2款 第1工業技術基礎 1目標)

実験・実習を通して、工業に関する広い視野と技術者として望ましい倫理観や勤労観・職業観をもち、工業の諸問題を適切に解決し、工業の発展を図る意欲的な態度を育てることである。

【例】看護 [専門] (第2章第1節 基礎看護 第2 1内容の構成及び取扱い p. 9)

ア 指導に当たっては、望ましい看護観や職業観及び看護職としての倫理観を育成すること。(高等学校学習指導要領 第3章 第6節看護 第2款 第1基礎看護 3内容の取扱い)

情報化の進展など社会の変化の中で人々の考え方は多様化し、個人の考え方が尊重されるなど、人権の尊重が重要な時代となってきている。このような社会の状況の中にあつて、看護に携わる者は、専門職として対象者の様々な要求に的確にこたえる責任と義務があると同時に、人間の生命や人権を尊重した信念、倫理観に従って看護を行っていくことが重要となってきている。

すなわち、この科目の指導に当たっては、看護の専門職業人としての精神的基盤である看護観や職業観及び看護職としての倫理観を育成し、自ら判断し行動できる力を育てるように工夫することが大切である。

【例】情報 [専門] (第2部第2章第1節 第2 2(1)イ 情報化の進展と情報産業の役割 p. 59)

情報産業が、社会の情報化を支え、発展させてきたことや望ましい情報社会の形成に重要な役割を果たしていることについて理解させる。また、委託業務の増大や業務の国際化などにより、情報産業の業務内容や業務範囲等に変化が生じていることや情報産業で働く技術者がどのような役割を果たしているかについても理解させる。その際、これからの専門教科情報科の学習に関する目標や指針について考えさせるようにすることが大切である。

(3) 地域や学校・学科及び生徒の特徴などに応じた実践例

自ら学び自ら考えることが重要になってくる高校生期においては「学ぶことの意義」や「学ぶことの価値」を知ることが大切である。自己の判断力や価値観を創るうえで体験活動から学ぶことや、体験することとの関係で学ぶことが重要である。

ここに示した5つの高等学校の実践はあくまでも事例であり、地域の特性や学校の特性に応じて、系統的・継続的に「基礎的・汎用的能力」及び専門性の基礎を伸長していくことが求められる。

① G高等学校の事例—目的を持った進学と進学後の職業人生を考えさせる学習—

<p>《地域の状況》 県の中心地まで30分圏内の中核都市。首都圏にも近く、商業施設や大手企業の工場や研究施設、関連企業などがある。商工会議所や青年会議所などの活動も盛んである。 地域に卒業生も多く在住しており、高い要望もあるが、全体的には協力的な環境である。</p>	<p>《学校概要》 1学年8クラス、全校24クラスの普通高校で歴史ある伝統校として地域に定着している。いわゆる「難関大学」への進学率も高く、著名な卒業生を多数輩出している。 《学校の教育目標》 ・自己探求による高い知識の習得 ・社会に貢献できる心豊かな人格の育成</p>
--	---



<p>《キャリア教育目標》 高校卒業後の人生、とりわけ約40年間におよぶ職業人生を見据えた本物体験を行う。その体験の中で視野を拡大し、自己を見つめ、自己の将来を考える。そしてその実現のために必要な知識や経験をどのようにして得るかを具体的に考える。 《目指す生徒像》 ・自ら学ぶ姿勢と学び方を生涯にわたって実践できる生徒 ・広い視野とコミュニケーション力を持ち、他者と協力することができる生徒 ・自己の個性を把握し、創造力を駆使して積極性に問題解決ができる生徒 《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
<p>人間関係形成・社会形成能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会人として役立つあいさつ、マナー、コミュニケーション力などを身に付ける。 ・他者を受け入れる態度や自己の考えを伝える表現方法などを身に付ける。 	<p>自己理解・自己管理能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各教科の学習や総合学習の体験を通して自己を客観的に理解し、将来への展望を考える。 ・自己実現に向けた道筋を具体的に立ててみる。 	<p>課題対応能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・問題を発見し、分析し、整理し、計画的、合理的に解決するスキルを身に付ける。 ・様々な方法での情報収集と外部の知識も受け入れながら創造的な解決を図る。 	<p>キャリアプランニング能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・変化する世の中にも対応できる自分作りを主体的に行う必要性を理解する。 ・「働く」意義を理解し、自己の在り方や理想とする将来設計を考える。



<p>《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯 ・県教委から学力推進校の指定を受けており、現状以上の進学実績が求められている。 ・大学卒業後の就職や離職の問題を考慮し、高校時代のキャリア学習が大学でも継続できるような配慮を求められている。 ・学校を応援する地域や組織が具体的にできあがってきた。 （卒業生や保護者の組織）（行政や企業からなる地域の組織）（大学等進学先からなる組織） ・総合学習で得た知識をさらに探究するオプション講座の開設が可能となった。</p>
--

<p>《実践例—1年生・総合的な学習の時間》</p> <p>自己の将来を見据え、関連する様々な知識を習得し、社会での本物体験を行う。体験に至るまでの準備期間には社会で必要なスキルを身に付ける。また体験による情報を報告会により生徒間で共有させることにより各生徒の視野の拡大につなげる。様々な外部による協力とオプションの講座により内容を深化させる。</p> <p>4月 オリエンテーション 学習の目的と年間スケジュール 講座①「なぜ学ぶのか」【*1】</p> <p>5月 講座②「将来に備えて何が必要か」【*2】 ～自分の理想とする将来を考える～ ・卒業生による講座</p> <p>6月 講座③「社会人として何が必要か」【*3】 ～社会人に聞く～ ・経営者による講座</p> <p>7月 職場体験 準備 【*4】～様々な職業を知る～</p> <p>8月 職場体験 【*5】～職業を体験する～</p> <p>9月 職場体験 報告準備 【*6】～体験と自己の将来を考える～ オプション講座の設置 【*7】</p> <p>10月 報告会 【*8】～話し方、聴かせ方を学ぶ～</p> <p>11月 進路指導 面接や次年度選択科目についての検討</p> <p>12月 講座④「夢を持つこと」【*9】～自己の将来を前向きに考える～</p> <p>1月 講座⑤「説得力のある伝え方」【*10】～自己の考えを伝える方法～</p> <p>2月 年間報告書の作成</p> <p>3月 公開報告会【*11】～関係者を招いての代表者による報告会～ 「なぜ学ぶのか」というテーマから体験を通して学んだこと、将来への影響など年間を通して学んだことを報告する。</p>	<p>《特に注目すべき点》</p> <p>【*1】学校としての視野に実社会的な視野を加えて講義する。話の聞き方、メモの取り方なども指導する。</p> <p>【*2】年齢の比較的近い卒業生を選んで依頼する。あいさつやマナーについても指導しておく。</p> <p>【*3】商工会議所へ依頼する。</p> <p>【*4】商工会議所、青年会議所へ依頼し、12箇所以上の職場を紹介する。コミュニケーションや身なり、言葉遣いの指導をしておく。</p> <p>【*5】複数日体験するが生徒の状況により見学レベルから体験レベルまで用意しておく。</p> <p>【*6】報告により情報を共有させる。プレゼンテーションの仕方を指導しておく。</p> <p>【*7】商工会議所、青年会議所と連携したイベントなどへの参加による実践。</p> <p>【*8】第三者として保護者の評価を加える。</p> <p>【*9】商工会議所、青年会議所へ依頼する。</p> <p>【*10】文書の見せ方から話し方までプロの技を紹介する。</p> <p>【*11】関係者には大学関係者も入れて講評依頼。オプション講座の報告も紹介する。</p>
---	--

《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

単にいわゆる「難関大学」への合格をもって、高校における進路指導を終了とみなすのではなく、大学卒業後の社会で対応できる力の基盤を培うことが重要である。キャリア教育における大学との連携により、将来を見通した系統性のある学習が可能になり、就業まで視野に入れた現実即した将来展望を持たせることに貢献できる。

また、学校を応援してくれる様々な人や組織を活用する仕組みを作ることにより、学校での負担が少ない形での導入ができる。本事例ではキャリア教育の実践を通して、教員のキャリア教育への関心が高まり、地域のイベント企画参加、商品開発、福祉やサービス企画などがオプション講座として開設された。それにより、より充実した体験的なキャリア教育が行われ、進学や進学後の就職を見越した活動にも好影響を与えている。

② H高等学校の事例—「地元を知る」ためのコミュニケーションを重視した授業

<p>《地域の状況》 昨今の厳しい経済情勢から観光を柱とする地域経済も斜陽化。地域再生のための新しい観光の在り方を模索。地元食材の活用や外国人観光客誘致が進められている。地元企業は少なく、高校卒業後は大学に進学、そのうち半数以上が都会に進学し最終的にふるさとを離れる。</p>	<p>《学校概要》 創立は明治期という、地域、普通科の伝統校。文武両道を掲げ同窓生や地元からの信頼も厚くその分期待も大きい。</p> <p>《学校の教育目標》 骨太な生徒 「社会で役立つ人間を育てる。」</p>
---	--



<p>《キャリア教育目標》 地域社会を知ることによって自己理解を深める。 地域社会の一員として地元地域の将来について考え役割を担う。</p> <p>《目指す生徒像》 地元に対する考察から、自らが育ってきた環境を客観的にとらえると共に、学校での学びを自分自身との関係でとらえ、これからどこでどのように生きるかというビジョンを持った生徒の育成。上級学校での自主的学習への移行がスムーズにできる生徒。</p> <p>《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
<p>人間関係形成・社会形成能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 相手の話をしっかり理解する。 自分の考えをまとめる。 自分の考えを正確に相手に伝える。 コミュニケーションスキルを身に付ける。 チームワークを理解し役割を担う。 グループ内やクラス内でリーダーシップを発揮する。 	<p>自己理解・自己管理能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 自己のルーツを知ることによって自分が何者なのかを知る。 自分の育ってきた地域の産業について理解する。 地域の環境や自然・文化・哲学について触れ、他の地域と比較し客観的に考察する。 自己を肯定的に捉え将来に向けて主体的に行動する。 自己の感情をコントロールをしながら発言し自己発見を進める。 	<p>課題対応能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 問題点を発見、分析して適切な計画を立てる。 情報収集に関して情報源の特性をとらえる。 集団によってアイデアや発想を生み出し具体的な活動につなげる。 協働によって課題を克服する。 現代社会が抱える課題に対して意欲的に取り組み、従来の考えにとらわれず、前に進むことがでる。 	<p>キャリアプランニング能力</p> <ul style="list-style-type: none"> 自ら情報を収集し適切に取捨選択し活用する。 自分が選択できる条件を整理する。 地域の経済や雇用について知り自らの役割について考える。 将来何になるか、どのように生きるかという問いや「どこで」という問いに「地域」の視点を加える。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯

- いわゆる「難関大学」への進学を柱に地域を代表する名門高校として発展してきたが、大学入試結果でその後の人生は保証されず、仮にそのような進学が大企業等への就職に結びついたとしても、それが地域の将来や、生徒の幸せにつながるのか疑問を持つ家庭や職員も増えてきた。
- 将来社会で役立つ人材を輩出する教育をするべきだという議論が高まり、県の学力向上指定事業を受ける中で、各教科でのグループワークの研究開発に取り組んだ。
- 注入型の受け身の授業に慣れきっている生徒に、自分の意見の提示、知識の活用やアウトプットの機会を増やすことによって、教員が示す結論や正解でなく、自分たちの手で主体的に集団のコミュニケーションから生まれる学び本来のプロセスを楽しむ授業が展開できないかという発想から推進された。

<p>《実践例－1年生・現代社会「地域社会についてのグループ学習」》</p> <p>「地域の抱える課題についての討議」【*1】</p> <p>まず、個人で考える 3～5時間程度</p> <p>調べ学習として下記①～⑥を調べて⑦を提案する。 調べる際にはメディアの特性（長所・短所）に配慮する。【*2】</p> <p>地域の産業・社会・経済の変化を知る。 (例)</p> <p>①地域に関わる基礎的なデータ ②地域をとりまく自然環境の特色 ③地域を支える産業，経済や交通 ④地場産業や有名な特産品 ⑤地域で継承される伝統や文化 ⑥地域の自治体における諸政策や国内外との結び付き ⑦地域が抱える課題</p> <p>※商工会・役所の地域振興課や商工観光課，都市化計画課，地元企業家，芸術家，歴史研究家などを招いて講話をいただいたり，グループワークに参加していただいたりすると理解が深まる。</p> <p>次に、グループで考える 3～5時間程度【*3】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各人が自分の強みを持ち寄り意見を言うことで価値を創造していくことが，ここからの学習のスタイルであることを宣言する。 ・自由に意見を出し合う。その際相手の意見は否定しない。 ・キーワードを決めて，それを中心に置き，関連する用語を周囲にちりばめ，お互いを結び付け，その関連を図に示してみる。 ・付箋に自分の意見を書き，全体でその付箋を集めて意見を分類しグループに分ける。この方法でアイデアを搾り出す。 ・上で出てきた意見やアイデアを元にディベートやシンポジウム・ロールプレイングなどを行い，更に理解を深める。 ・どの問題の解決が最優先か順位付けについて意見を述べ合い，理解を深めることもできる。 <p>⑧解決策を考える 「私の描く地域の未来像」という主題で文章を書くことで考えをまとめる。 どこでどのように生きていくか，客観的，具体的で無理のないストーリーで描かせる。【*4】</p> <p>⑨発表会を行ってお互いの未来像を共有化させる。【*5】 その際には，ビデオやプレゼンテーションソフトなどを活用したり，得られたデータをGISソフトを使って地図化したりする。 発表会は一般の参加も呼びかける。研究結果についてホームページを作成し学校内外の相手に分かりやすく伝える。</p>	<p>《特に注目すべき点》</p> <p>【*1】現代社会が抱える環境，ゴミ，保育，治安，外国人，医療，災害，文化財，スポーツ，地域活性化などの分野が考えられる。地域が抱える問題点を総合的に捉えることで他の地域との比較の基準を持つことができ，自己理解が深まる。</p> <p>【*2】インターネット，図書，テレビ，ラジオ，新聞などの他，アンケートや現地調査なども有効であり情報源の所在について理解させたり，入手した情報を活用する際の情報の信頼性を見極めることの重要性を具体的な事例として理解させたりする。</p> <p>【*3】集団のコミュニケーションからアイデアを主体的に導き出す経験をする。順位付けをさせると自らの判断基準を相手に説明しなければならないので議論が深まる。</p> <p>【*4】自分がどのように関わるかが触れられていると良い。キャリアプランニング能力が高まる。さらに，自己の問題だけでなく地元経済の持続的発展方法について触れられているとアクションにもつながる。</p> <p>【*5】ポスターや地図・年表にして可視化することで成果を伝えることができる。</p>
--	--

《本実践例から得られる示唆―他校への応用に当たって―》

- ・話し合いの中で，他人の意見の重要性や視点の違いに気付くことで自己理解が深まる。
- ・教授型の授業では確保しにくい生徒が自分の考えを表出する回数を増やすことができる。
- ・情報源について吟味したり，表現方法を検討したり，グループでコミュニケーションをとりながら結論に至る学習活動は，国語，地理歴史，公民，情報などの教科だけではなく，上級学校や社会に出てからの課題対応力につながる。

③ I 高等学校の事例—職業興味検査をきっかけとした進路探索活動の活発化—

<p>《地域の状況》 ローカル線の駅が唯一の交通手段、その駅から徒歩15分程のところに学校は存在する。学校の周りには田畑が広がっており、高齢化が顕著な地域。進学先、就職先が地元では少なく、卒業後、自宅を離れる生徒が多い。生徒の進路は多様である。共稼ぎの家庭が多く、保護者会への出席も悪く、PTA活動はあまり活発ではない。家庭との連携した教育活動が課題としてあげられる。</p>	<p>《学校概要》 専門高校と普通科高校を2つ併合して開校した総合学科、720名、6クラス規模。</p> <p>《学校の教育目標》 1. 夢をはぐくみ、その実現を目指して、自主的に自己の進路をひらいていく能力を養う。 2. 幅広い教養を持ち、国際性に富み、感性豊かな人間を育成する。 3. 自ら考え、主体的に判断し行動することのできる人間を育成する。</p>
--	---



<p>《キャリア教育目標》 ●生徒に「学び方」を習得させ、生涯を通じ、自己研鑽に励む能力・態度を養う。 ●自己の個性を大切にすると共に、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合う他者態度を養う。 ●変化する社会を見通し、「将来の自分」について考える力を高める。 ●自己実現へ向けて、自主的、積極的に励む態度を育てる。</p> <p>《目指す生徒像》 1. 規範意識が高く、場をわきまえ、行動できる生徒 2. 高い目標を見だし、その目標実現に向けて、生き生きと活動する生徒 3. 自他の生命を大切にし、豊かな人間関係を築ける生徒</p> <p>《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
<ul style="list-style-type: none"> ・ 職業に関する自分の考え方を周囲に説明することによって、自他の考え方や価値観の違いを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職業興味検査の結果を的確に読み取る。 ・ 職業と能力・適性・個性について考える。 ・ 職業によって適性が違うという多様性について理解し、自分の特性も把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ モデルを使って物事を整理分析し、実際の問題に当てはめるという方法を身に付ける。 ・ 分かりにくい事象を段階を追って理解していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ なりたい自分をイメージする。 ・ なりたい自分になるために必要な条件を整理し今後、いつまでに何をしたらよいか方策を考える。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯
進路について2年生にアンケートを取ったところ「自分の進路が分からない」「自分が何に向いているか分からない」といった回答や「進路を決めていく手順について知りたい」といった回答が多かった。
5月に実施している職業興味検査結果を、生徒に配布するだけで、各生徒の判断にまかせ、十分に活用されていなかった。職業興味検査が科目選択や系列選択に、有効に活用できることを知り、その活用について研修会などを実施し、活用方法などを検討した。職業興味検査を中核に進路探索に活用したところ、科目選択、系列選択のミスマッチも大幅に少なくなった。教師からは、生徒の学校への不適応傾向を示す生徒が減少し、怠学傾向も少なくなったという評価も得るようになった。

<p>《実践例》</p> <p>1年1学期・「職業興味検査実施」【*1】実施後、担任やキャリアカウンセラーから面談などでアドバイスをもらう。</p> <p>・「職業調べ」興味ある職業について、仕事内容、資格・免許の有無、就く方法、キャリアパス、就業者数等を調べる。興味ある職業の類似職業も列挙させる。</p> <p>1年夏休み・「上級学校の学問調べ」検査結果で興味があると判定された学問分野に、高校での学習内容がどのようにつながっていくのか調べる。希望の学問分野の講座をあげ、高校でどのような学習をしておくとか調査レポートを提出する。</p> <p>・「職業人インタビュー」興味があると判断された職業に就業している人にインタビューをする。同窓会や保護者の協力をお願いしたり、広告会社等のイベント等を利用したりして、実施する。</p> <p>1年2学期・「上級学校理解」海外の学校、日本の四年制大学・短大・専門学校について理解を深め、自己の希望を実現させる方法を理解する。</p> <p>・「科目選択」【*2】興味・関心、能力・適性を重視して、科目選択を行う。</p> <p>・「インターンシップ」働くことの現実に触れる。</p> <p>2年夏休み・「上級学校のオープンキャンパス参加」【*3】どんなことを、どのような教育環境で、どのような方法で学び、どのような専門的能力を身に付けられるのかを実地踏査する。</p> <p>2年2学期・「進路希望調査」進路希望を調査するだけでなく、進路希望をかなえるためのスケジュールを立てる。</p> <p>2年～3年春休み・「スプリングオープンキャンパス参加」進学希望者は志望校の選択を絞り込む。</p> <p>3年1学期・「進路説明会」進路選択の情報提供や手続きの伝達だけではなく、進路先決定後を見据えながら、やっておくことを考えさせることが大切である。内定や合格した後に、生活を乱したり、怠学したりすることを防ぐことにもなる。次の進路先で成果をあげるための、準備期間になることを明確化する。資格取得コンテスト参加の奨励、専門書の読破、課題研究の充実等を提示する。【*4】</p> <p>3年夏休み・「企業見学、オープンキャンパスに参加」進路の選択や、志望を明確にする機会とする。</p> <p>3年2学期～3学期・「進路の選択・決定」進路の決定時期は生徒それぞれ異なっており、早期に決まる者には準備学習を、遅く決まる者には、明確な進路目標を持たせることが大切である。</p> <p>3年3学期・「振り返り」三年間の進路探索を振り返る。どのような過程を経て、今の進路に歩んだのかを整理させることで、卒業後の活躍の意欲を喚起し、進路先への適応を高める。</p>	<p>《特に注目すべき点》</p> <p>【*1】職業興味検査は、職業興味を知るだけでなく、パーソナリティー、学問への興味の志向性を知ることができ、自己理解を深めることができる。活用の手引きを読み、結果の見方を理解した上で面談にあたる必要性がある。</p> <p>【*2】学ぶことは、単に進路実現するための手段ではなく、興味がある学びを通して進路希望を発見することも少なくない。学ぶことの意義を理解させる活動を通して、キャリアプランニング能力をはぐくみたい。</p> <p>【*3】希望の進路先以外の情報も入手した上で、進路選択は行うことが望ましく、進学希望以外の生徒にも実施する。進路を選択する能力を高めることはもちろん、異なる進路に進む人に対する理解にもなり、人間関係形成能力の礎となる。</p> <p>【*4】高校卒業後の進路先の決定は、社会的・職業的に自立するための通過点であって、終着点ではないことを伝えることが大切である。生涯にわたって、自己を成長させていく態度を培うことになる。</p>
--	--

《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

職業興味検査については正確な理解とフォローアップを怠ると独りよがりな間違っただ自己理解や価値観の形成につながる恐れがある。検査の結果を有効に活用する方法を学ぶことで、自己理解を深め、今後のキャリア形成にも役立てることができる。

社会心理学における職業選択に当たった基礎理論を理解することによって内容を深めることができる。どの仕事にも必要となる能力が基礎的汎用的能力と言えるが、職業に就くには更に専門的能力を身に付けることが必要だということを理解させる。職業に就くための学歴や資格等の知識は、キャリアプランニング能力の基礎となる。

④ J高等学校の事例 — 「自分を売り込む」積極参加型オープンキャンパス

<p>《地域の状況》 地方の中堅都市であり、大きな産業もなく、職種も限定されてしまうことから若干ではあるが人口の流出なども見られる。大学・短大・専門学校などの教育機関も少なく、卒業後に大半の生徒が都会に出て学ぶ。</p>	<p>《学校概要》 平成11年に設立された全県一区の総合学科高校。8クラス規模で就職と進学が混在する多様校。進学先も大学・短大・専門学校など幅広い。</p> <p>《学校の教育目標》 ・確かな学力を身に付け、将来につなげる ・自己の将来に対して積極的に取り組む姿勢を身に付ける</p>
--	--



<p>《キャリア教育目標》 ・様々な進路に関する知識を深め、実際に自分の目で確かめ、自分の将来との関わりを考える。 ・自己理解を進めた上で将来を具体化させるための道筋を考え、高校卒業後の進路を決定させる。 ・社会で役立つコミュニケーション力やマナー、社会常識を身に付ける。</p> <p>《目指す生徒像》 自己の進路に対して自主的に行動し、興味関心を持って積極的に取り組む姿勢を持つ生徒。言葉や文章などを中心とした人とのコミュニケーションを円滑にすることができる生徒。課題に対して創造的な解決策を考え、計画的に実行することができる生徒。</p> <p>《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
<ul style="list-style-type: none"> ・学校外の人たちとの会話を通して話の聞き方や自分の考えの伝え方を考える。 ・様々なキャリア体験の実施前後の学習の中で社会に必要なマナーやコミュニケーションを学び、円滑な人間関係を構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・過去に学習した自己理解を再確認し自己の進路選択実現に向けて積極的な努力を行う。 ・様々なキャリア体験により得た知識と自分の考えを客観的な視野を通して見ることでより、より深く社会の中の自分を理解、把握する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自己の進路に関わる問題点を把握し、積極的な解決策を模索する。 ・質問事項を整理することにより、計画、立案、実行、評価といった過程を学ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な情報を積極的に活用しながら行動や体験に基づいた計画を考える。 ・自ら進路先へ働きかける体験を通して、将来においても計画的に目標設定ができる力を付ける。 ・様々なキャリア体験を最終的な志望校決定につなげる。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯
入学時点より適性検査を導入するなど、自己理解をすすめながら文理選択・志望系統を決定させている。「地方では志望先に対する情報が限定されてしまう。」「志望校だけでなく、受験までに都会の雰囲気や生活についても具体的に知ることが必要」という話は以前から話されていた。また、4月に進学したばかりの卒業生が5月に「退学」したり「再受験のために休学」したという話が周囲でも増えている。これらは「産業社会と人間」や「総合的な学習の時間」で将来に対するガイダンスや体験は導入しているが、自ら進路を切り開こうという積極性が欠けていたことの結果と思われる。

これを解決する手段として実際に進学先を見に行かせる活動を導入した。将来の希望や、自己理解、志望先との情報交換を目的としたエントリーシートを個々に作成させ、安易な進路変更を防ぐ手立ても行った。また、その過程においては文章力や表現力を高めかつ社会に必要なマナーやコミュニケーション力を身に付けさせた。

エントリーシートは、構成や活用の仕方により各校の抱える問題点を明確にし、生徒にも伝わりやすい形で提供できる。訪問先との交渉の中で自分の聞く力や伝える力を知り、日ごろの学習の必要性を再認識させることなどもできる。

<p>《実践例—2年生・学校行事「自分を売り込む」積極参加型オープンキャンパス》</p> <p>事前準備 LHR等 ※適性検査の結果なども参考に（6～7月） 情報収集 インターネット・受験情報雑誌・入学案内などで調査。 第三者評価 大学基準協会・大学評価学位授与機構などの評価も調査。「教わること（受け身）・学ぶこと（自立）」という二つの視点から、その上級学校の環境（学ぶ意欲が促進され・その方法もしっかりと習得出来そうか）が偏差値や世間一般の評価ではなく自分に合っているかどうかを判断する。</p> <p>訪問先決定 具体的な訪問予定上級学校を主体的な選択で絞り込む 訪問日や時間・訪問方法などの決定 質問を考える（何を見に行くのか・何を確認するのかなど）</p> <p>アポイント 訪問予約を取る。（電話で生徒本人が依頼）【*1】【*2】【*3】 通知文書作成 受け入れのお礼、訪問日時や訪問目的等の確認等（手紙・メール・FAXなど）</p> <p>事前準備2 LHR等 エントリーシートの作成 ・今までの学習内容 ・自己の将来に関する考え ・訪問校について調べたこと ・訪問校と自己の将来との関連 ・質問事項（可能ならば学生へのインタビュー） 場所の確認 訪問校の場所や経路の確認</p> <p>上級学校訪問当日（平日や文化祭等受入校側の学生がいる日）【*4】 エントリーシートを使って自己紹介 説明に関する必要事項のメモ 質問 施設見学等</p> <p>事後 LHR等 礼状作成 訪問後はなるべく早く謝辞を伝える。感謝の気持ち・訪問の感想・今後の決意などを書き記す。手紙を書くのが好ましい。 自分の希望がアドミッションポリシーと一致するか確認する。</p> <p>事後2 LHR等 報告書作成 報告会 同じような進路の分野を考えている生徒同士で報告会を開きグループでのシェアリングを行う【*5】</p>	<p>《特に注目すべき点》</p> <p>【*1】 依頼状・礼状の作成は国語などの中でも扱える。訪問先への連絡方法や担当者名をひかえておく。高校教員と上級学校とのコミュニケーションがとれているとスムーズである。</p> <p>【*2】 大学・短大・専門学校、国公・私立、地方・都会等タイプの違う学校を選ぶとよい。</p> <p>【*3】 通常の授業が行われている日に見学すると雰囲気分かる。</p> <p>【*4】 感想や、話し方や内容についてのアドバイスを受ける。</p> <p>【*5】 お互いが実際見てきて得た情報を交換しあう。人に説明することによって自分の意志も整理されていく。</p>
---	---

《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

訪問することで、書籍やインターネットでは分からない学習環境や生活環境を知ることができる。行事などの扱いとして、平日に訪問できれば、授業を見学したり聴講する機会にもなる。

教科との関連としては、国語や情報等で授業の目的と照らし合わせ授業の中に組み込むこともできる。何度も文章を書き直すことは、自分について深く考察したり、保護者や周囲と話すきっかけにもなる。自己紹介の文章と将来の希望を志望先に説明するという方法は、「上級学校合同説明会」や「職業見学」といった機会にも行うことができる。このような準備は、啓発的体験に受け身で参加するのではなく、自ら積極的に情報を得ようとする姿勢につながり主体的に進路を選択していく態度につながる。

さらに、アドミッションポリシーの確認にもなるので上級学校との接続教育にもつながる。

⑤ K高等学校の事例—ジョブシャドウイング：仕事観察型体験学習の取組

<p>《地域の状況》 サービス業が盛んな地方中核都市。商圈もやや広く商品販売額が多い。市街では郊外型の大型店舗の進出で地元商店街は衰退している。高校生の特に女子の事務系採用は減少傾向である。</p>	<p>《学校概要》 商業科と総合学科の併設校。6クラスの生徒のうち進学と就職が50%ずつ。創立七十年の商業高校が母体であり多くの卒業生が地元で活躍している。評判は比較的良好い。 《学校の教育目標》 「自律・誠実・貢献」</p>
---	---



<p>《キャリア教育目標》 高い人間性と専門性を持ったチームプレーができるスペシャリストの育成。</p> <p>《目指す生徒像》 学校での学びと仕事を結び付け、スキルを身に付けることや、学ぶことの大切さを知り、自主的・主体的に学校生活に取り組む生徒。</p> <p>《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》</p>			
<p>人間関係形成・社会形成能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・性別や年齢・個性・価値観等の多様な他者と協働・協力し自分の役割を果たすことで仕事が進められていることを知る。 ・仕事の種類や会社の仕組みを知る。 ・社会においてチームワーク・コミュニケーションスキルが重要であることを知る。 	<p>自己理解・自己管理能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会人の価値観や思考を基準に自らの時間感覚や行動について見直す。 ・入学時より進めてきた服装や礼法の大切さを理解し、マナーやドレスコードなどを社会人として通用するレベルで実践することができる。 ・仕事によって得られるものを知り、働く喜びを感じ社会に出て役割を担う自信と希望を得る。 	<p>課題対応能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高校での学習内容が社会でも活用されていることを知る。 ・問題点を発見し分析して適切に記録し情報を整理することができる。 ・仕事を通して得られる価値や問題点を発見する。 ・自分自身のキャリア形成と体験を結びつけ日々の生活に落とし込むことができる。 	<p>キャリアプランニング能力</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入学以来漠然とイメージしていた社会人や仕事・会社組織について具体的理解をする。 ・グローバル化や情報化・技術革新の現状を知る。 ・3年時、求人票の内容を正確に理解することに繋がる。 ・自分が将来働くことに対するイメージを持つ。



《キャリア教育の目標》《特に身に付けさせたい基礎的・汎用的能力》などの設定の背景と経緯

- ・就職課が新3年生の求人依頼で企業訪問をしたところ、厳しい就職環境の中で就職した昨年度の卒業生が3箇月も経っていないのにかなりの数で離職していた。「好きな分野の仕事をさせてもらえない」「会社組織になじめない」といったことが原因らしい。
- ・数年前から、キャリア教育を進め、インターンシップを導入しているが、アンケート調査をしたところ、「中学校で同様の体験をした」「インターンシップでは任された仕事に打ち込むため、周囲で働いている人が何をしているか観察できない」「会社組織の仕組み」や、「ホワイトカラーの仕事の内容が分かりにくい」といった意見が聞かれた。
- ・企業側からは社会が求める力と学校の内容や人材育成がミスマッチではないかという指摘を受けた。
- ・課長主任会では「まだまだ『会社組織』というものに対する理解が乏しいのではないか」「働いている人々が組織の中でどのような思いで仕事をしているか」「『仕事はチームプレーと言われるが、どのように連携・協力しているか』を学ばせる機会をつくるべきだ」という意見が出た。

《実践例—商業科1年生・「ビジネス基礎」の一環としてのジョブシャドウイング》

《特に注目すべき点》

事前指導 【*1】 (5月頃～)

会社の社歴や創業者の思いをうかがう。
 なぜこの地にて事業を展開しているのかを知る。
 訪問する企業と業界に対する知識を深める。
 会社組織の構成
 責任と役割分担
 社会人として必要な職業観・勤労観
 事業所でのマナー (ドレスコード・休憩所での心得・あいさつ・ゴミ処理や下駄箱ロッカーの使い方等)
 ※仕事を見せていただく方の仕事内容や組織における役割を事前に確認しておく。【*2】

当日朝 (7月)

簡単な自己紹介をした後、仕事をしている傍らに寄り添い仕事ぶりを拝見させてもらう。【*3】

働いている人から学ぶ。
 会社組織を知り実際の連携を見る。
 会社内の環境や使われている機器・施設設備、マナーや顧客に対する配慮なども観察する。
 職業人としての職業観・勤労観を直接学びとる。

当日昼 ランチミーティングの機会を活用したインタビュー

※質問についてはあらかじめいくつか考えておく。【*4】
 一緒に昼食をとりながら、仕事への思いをうかがう。
 組織の仕組みを理解し役割分担について深く考える。

事後 (会社の方にも参加していただく) 【*5】

学校に戻って、見学させていただいた方の仕事内容と事業部・部署の役割や連携体制についてを簡単にまとめる。
 体験したことやまとめたことを、全体に発表することで企業内の連携体制や役割分担を理解する。
 理解したこと・感想・感謝の気持ちをまとめ礼状を書く。

【*1】 営業・企画といった仕事が増えているがその内容を実際に学ぶ機会は少ない。この事前学習によっていわゆる「業界」「ライン」「スタッフ」を知ることによってキャリアアッププランニングをすすめる鍵となる。

【*2】 「事業部制組織」など会社組織についての学習となり自分自身のキャリアアッププランニングにもつながる。

【*3】 通常どおりの仕事を進めていただく。職場のルールを守りながら見学することで自己管理能力を高める。

【*4】 「もしその部署が無かったら」「もしこの部署でミスが発生したら」など質問することで組織に対する理解が深まる。コミュニケーション上の工夫についてもうかがう。

【*5】 各部署に分かれて見学した高校生各人の体験を共有することによって会社の全体像が浮かび上がり組織が理解できる。

《本実践例から得られる示唆—他校への応用にあたって—》

- ・「ビジネス基礎」の「内容(2)ビジネスとコミュニケーション」に焦点を絞り、ビジネスにおける基本的なマナー、良好な人間関係を構築することの意義や必要性及びビジネスに対する望ましい心構えや考え方を学びぶと同時に、ビジネスの場面に応じた言葉の使い方などコミュニケーションの基礎的な方法について実社会との関わりを通して学ぶ機会とした。
- ・グローバル化や情報化の進展の中で現代の企業が求める人材について学び、幅広い学びと柔軟な対応が欠かせないという事実を知ることができる。
- ・時間やマナーなど生活面を見つめるので有意義な学校生活を送らせることができる。
- ・働いている人を見ることによって勤労に対する考え方や職業理解、仕事に対する責任感、社会が求めるチームワークやマナーを学び取りやすい。仕事をするためには学び続けなければならないことが理解され学習意欲の向上に反映されやすい。学習時間の向上に結び付いた例もある。
- ・企業側にとっても通常業務が進められ、高校生からの感想を聞くことで業務や組織・仕事内容を再認識するなど新鮮な体験となっている。